

TAKI no TAWAGOTO

代筆 濱 博一

一号去ってまた…(^^;)代筆で失礼いたします。

金沢に単身赴任をして長いのですが、マンションの前には大型ショッピングセンターがあって至極便利。その2階のレコード屋さんが4月中旬で閉店。最終セールでは500円のDVDシリーズがなんと3本で千円！レンタル料金並みの1本333円という値段で、かつての名作が入るとあって早速数千円分を買いだめ。にわかコレクションとなりました。



今回はその中から「素晴らしき哉、人生！」をご紹介します。主人公のジョージ・ベイリイは、有能な青年。世界旅行を夢見、大活躍をする自分の将来を確

信していましたが…父の突然の死によって已む無く会社の跡を継ぎます。その事業内容は貧困者向けの住宅金融。そうです。今騒がれているサブプライムローンそのもの。理想と現実の狭間で幾多の困難を乗り越えたジョージ。しかし家族に囲まれて幸せのはずのクリスマス・イヴに最悪の事態に陥った彼が目にしたものは…。

父とジョージ。彼の妻。彼らを支える人々…。そこに描かれている姿には「慈愛に根ざしてお互いに助け合う謙虚な思想」に満ちている気がしてなりません。同じ住宅金融でも現代と本作品とでは天と地ほどの差があります。米国の良心を描き続けた監督ならではの。1946年のゴールデン・グローブ賞監督賞受賞作品です。

ところで、ジョージに対抗する人物がH. Potterという名前なのも、今日では笑えますね。

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2008/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/>

卯 月



by hama

寄稿 『究極の飲兵衛』

北陸大同産業株式会社 代表取締役 裏野 実

「ターキー、人情盛りで・・・」

マスターは軽く会釈をしてから、おもむろにロックグラスとバーボンウィスキーのターキーを用意する。ダブルなどという言い回しはどこか気取りがあるし、大盛りでは品がない。いつの頃からか人情盛りが私とマスターの間の符丁のようになった。

この店では大きな角氷をナイフで削ってまん丸にし、グラスにぴったりと収めてくれる。氷を丸くすることで表面積を四角い氷よりも小さくし溶けにくくしているのだ。これならターキーの味がいつまでもしつかりしているし、見事な球体の氷は芸術品のように美しい。間違いない。プロフェッショナルの心遣いと技だ。

そんな丸い氷にバーボンがそそがれた。氷はパキンという心地よい破裂音とともに沈みはじめ、グラスの底にたどり着いたときコトリと音を立てる。そして丸い氷は手元までグラスがすべり着いたとき、今度はパキパキと激しく鳴るのだ。

一杯目を飲みながらマスターに尋ねる。「究極のお店ってないのかな？」

「拍置いてマスターが聞き返した。「どんな店？」」

「一人で気軽に来られて、雰囲気良くて、深酒もできて、しかも低料金。欲を言えば、楽しい女性もいて、翌日は二日酔いしない店」ということは絶対ありえませんか？」

飲兵衛は絶対的な店を求め歩く。なぜならそんな店が

濱のつばやま 『旅立ち』

師匠と弟子の関係を表した「守破離（しゆはり）」について本欄で書いたのは二〇〇二年六月通巻十八号であった。

教えを守り・破り・離れる。それにはどれほどの覚悟が要ることか。伝統とは、伝えることと同時に、守るだけでは無い厳しさが要る。

と判ったようなことを書いていた。

この春、息子が就職し、東京に旅立って行った。その前後のやり取りの中で、社会常識を全く教えてこなかったことを嫌というほど知らされた。二十台半ばとなった人間に苛立ちを隠せないが、説教ではなく、諭すように伝えようとした。そして気づいたこと。それは、かつて父から自分に手紙などを通じて伝えられていたものを、今度は自らが語っていたことだった。

父子の間は、師弟関係とは比べようも無く甘い。会社組織で重要なものは「報連相」であると説き、その後それが必要になる仕掛けをしても、音沙汰が無い。口（頭）では判ったつもりでも、結果として行動に出ないのでは、理解していないに等しい。

禅老師が弟子に言葉を投げかける。それを受けて返す様子で弟子が何処まで悟ったかを見極めることを「挨拶」という。「今日は好い天気ですね」と時候の会話だけで終始するのは本来の「挨拶」とは、

一軒あればハンコする必要も無いし、どこへ行こうか考える必要も無いからだ。たった一軒で全てが癒されるなんて素晴らしいではないか。

私はつい仕事でもそんな究極が集まるような世界を求めてしまう。

上場会社にいくつもナンバーワンがあるような気がして、大企業のトップの経営哲学とか経営理念を参考にしようとしたこともある。だが、ヒントはどこにもなかった。

その時その時でお客様の都合と顔色を見ながら一騎打ちのように戦っている中小企業の私と大企業のトップではしゃせん戦い方が違つのかも無いが、その一方で世界を席巻するような企業であっても万事を究めるまでには至っていないのではないかと、そんなことも感じた。

けっきょくのところ何か一つだけでも他社には負けない良いものを築ければ良いのではなからうか。たとえば「この店の丸い氷はこの街で一番丸い！」とか。

そんなことを思いめぐらしながらバーボンも五杯飲めば、そろそろ酔っ払ってくる。となりのお客さんが「お酒を飲むとすぐ赤くなる」と言って笑った。そういう私はネオン色に染まり、それでもやはり究極のお店を求めて今日も虹色のあやしい光の中に消えていく。

あしたの商売の為に飲みすぎには注意。



【プロフィール】

（うらのみのる）1960年金沢市生まれ。北陸大同産業株式会社 代表取締役。販売管理などの業務系アプリの開発・販売。
<http://www.daidojp.com/>

かけ離れている。

人材育成で最近流行のコーチング。コーチとプレイヤーの間でも、本質的には本来の挨拶の意味と非常に良く似たやり取りが交わされている。返される言動によって本人に次に必要となる気づきをもたらす環境（言動・仕掛等）を、優秀な「コーチは用意できる」。

弟子を悟りに導く師弟の機微を「口卒啄の機（そつたくのき）」「口卒（は口偏に卒）という。ソツは孵ろつとする卵の殻を内側から雛が突く事。タクはそれを察して親鳥が外から突いて助けること。余程注意して弟子の様子を伺っていないければ、なせるものではないであろう。

思うに、「破」の局面は突然訪れるのかも知れない。例えば師匠の突然の死によって肉体的に引き離されたとしても、精神的に師匠と離れてきていなければ、「破」が訪れたとはいえぬのだろう。第三者的に眺められる師弟の様子からではなく、弟子の精神の中で何が起きているのかが重要な気がする。そして「破」が訪れることこそが師匠から見ると弟子育成の成功であり、喜ぶべきことなのかも知れぬ。愛弟子との離別がどんなに辛くとも。

一方、弟子はその瞬間からどのような道を歩むのか、完全な自己責任の道程が始まる。受け取る結果は全て自分の選択による。最早頼るべき師匠はいない。あるいはこの道を自律・自立といつものかも知れない。

いまさら自己紹介でもないが、私は大学で地理学関係科目を担当している。

今回はいつものスタイルの地域ルポではなく、標題についていくつかの新聞紙上で取り上げられたので一言、私見を述べる。

3月20日前後、新聞各紙に標題の記事が社会面に掲載され、秋田の地方紙『秋田さきがけ新聞』では「高校生の57%が宮崎県の位置知らず、知事は人気者なのに」という見出しで、地理認識の低さを紹介していた。この調査は日本地理学会が昨年12月から今年2月にかけて実施したもので、質問は秋田、栃木、東京、長野、愛知、石川、奈良、島根、愛媛、宮崎の10都県の位置を日本地図の47都道府県から選ぶものである。回答者数は7都道府県51校の高校生6,159人、全国31校の大学生計3,747人である。認知度の数値を見ると高校生では、低い順にみると宮崎が43%、愛媛が50%、島根が52%である。東京は93%が認識しているが、7%がわからないとしている。大学生においても、低い順に島根66%、宮崎67%と出ている。秋田県の認知度は、高校生77%、大学生86%であった。

読者のみなさんはこれらの数字に対して、「そんなに低いのか？」と驚かれるでしょうか。私はむしろ、「妥当な線、あるいは思ったより高い」と感じている。学校間のレベル差が多少はあれど、地理認識の低下は深刻な状況である

しかし、これは生徒・学生の学力とか認識力という問題だけではない。

私は、毎年4月になると、担当科目の受講生に対し高校での地理、歴史科目の履修状況についてアンケートを実施している。本学において、地理を高校で履修してくる学生は4割に満たないのが現状である。高校において世界史が必修で地理と日本史は選択であるが、高校（職業高校、郡部高校、一部都市部普通高校など様々）によってはそもそも「地理」を選択科目に置いていない。学ぶ機会さえ選択項目にないのである（ちなみに、理科における「地学」はもっとひどい状況にある）。秋田県内でも昨年、高校の未履修問題が発覚し進学校と呼ばれるところも、受験科目だけに絞り地理が科目にないところもあった。それ以前に、かつて日本の都道府県と県庁所在地は小学校3、4年生あたりで覚えさせられた記憶があるが、いまの小学校ではそういったことをやっていないようである。ある意味、彼らは犠牲者でもある。

大学に入り、中学校以来、「地理」という科目に遭遇した学生たち。また、その学生の一部が中学校社会や高校地歴の教職免許のために「人文地理」「自然地理」「地誌」といった教職関係の地理科目をとるのであるが、わずか半期14回の授業でやりきれものではない。しかし、こういった学生たちにせめて4年次の教育実習で恥ずかしくないようにという思いで取り組んでいる。また、新年度がはじまる。

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

相続について⑧

遺言状の必要性④ 番外編

今回のケースは、どうしても相続させたくない、いわば 相続人の廃除という、ちょっと特殊な場合です。

Case Study

山本さん(仮名)の次男は、消費者金融から多額の借金をありましたが、返済不能に陥ったため、山本さんが所有していた田畑を売却して、返済を肩代わりしました。それにもかかわらず、その次男はたびたび平気で山本さんたちに暴力まで振るうようになってしまいました。

こんな次男には、びた一文の遺産もやりたくない、心に決めたのです。

Anser

遺言で財産を渡さないようにしても、子には遺留分があるため、相続分を完全になくすことはできません。

このような場合、家庭裁判所に相続人の廃除の申し立てを行い、相続人の相続権を完全に剥奪することができます。

また、遺言で廃除の意思表示をすることが可能です。このような場合、被相続人の死亡後、遺言執行者が申し立てを行います。

排除の対象となるのは、遺留分のある推定相続人で、

- ・ 被相続人に対する虐待
- ・ 被相続人に対する重大な侮辱
- ・ その他の著しい非行

などが廃除事由に該当します。

さて、相続権の剥奪という行為は、ただ単に「嫌い」とか「ソリが合わない」等の理由では認められません。審判は個々のケースに基づいて家庭裁判所が下します。

また、自動的に相続権を失う、相続欠格者に該当する場合は以下のとおりです。

- ① 被相続人や相続人の先順位者や同順位者を殺したり、殺そうとして、刑を受けた者
- ② 被相続人が殺されたことを知りながら、告発・告訴をしなかった者
- ③ 詐欺・脅迫によって、被相続人が遺言したり、取消しや変更するのを妨げた者
- ④ 詐欺・脅迫によって、被相続人に遺言をさせたり、取消しや変更をさせた者
- ⑤ 被相続人の遺言を偽造、変造、破棄、隠匿した者

上記に該当するものは、手続きの必要もなく、相続権を失います。また、遺贈を受けることもできません。

「奄美発！ 蕎麦打ちサロン塾と協働のまちづくり塾」に、春の盛り、すでに初夏を感じさせる奄美大島まで行ってきた。県庁職員仲間三人での旅だ。

「何よそれ？なんで奄美大島に？」って問われ、「蕎麦打ちとまちづくりを掛け合わせた研修をやり。静岡県内ではやったことがなく、それに近いことを18年12月に熊本県人吉市でやっただけ」と答えた。

「全国に交流を求めて旅に出ている型破りの県庁マン」と奄美の地元紙に紹介された。

その言葉通り、全国に出向いて蕎麦打ちとまちづくりの話題提供、そして地域の課題を、地元の人々とホワイトボードを使ってのワークショップで明らかにし、解決方法を導き出すことを試みている。

18年度まで所属していたNPO推進室で企画した協働推進の研修や、イベントで学んだこと、由布院や環浜名湖の観光振興考える会「浜名湖えんため」や寸又峡、伊豆の観光振興にアドバイスをしてきたことをもとに、出向く地域に合わせて話す内容を吟味している。講演なんて形はとらず、参加型の研修方式にすることを心がけている。地域の課題の解決策は地元の人々が持っている。それを引き出して参加者みんなが納得の上に共有する、そのことができればと願って出向いているのである。

奄美でのリクエストは、亜熱帯奄美での蕎麦打ちという全く新しい食文化に触れることで暮らしを楽しむこと、協働の事例を中心に紹介することで、市民自ら「公」に積極的に携わることの契機にしたいというものだった。蕎麦打ち文化センターのすり鉢上の野外コロシアムに40人を超える人が集まり、大いに盛り上がった。体験というより習得したいという熱気が奄美の初夏を圧倒していた。「次はいつやってくれる？」「二ヶ月に一度はやってくれないか」というリクエストの声は嬉しかったが、700kmを越す距離を通うのは容易ではない。せめて年に一度ぐらいは来て、みんなの蕎麦打ちの腕の確認と奄美人の情に溺れたい。それと何より大事な「自律したまちづくり」を支援するためにね。

黒糖焼酎、やぎ汁、鶏飯、パイアの漬物、もずくの天ぷら、豚料理の数々、各種貝、たらふくの料理、そして三線に島唄が待っている。次は昭和30年代が残る奄美の加計呂麻島に行くつもりである。お楽しみはこれからだ。

